－所蔵作品紹介－

江口　週　EGUCHI Shu

北方の鳥―砂澤ビッキに捧ぐ

ほっぽうのとり―すなざわびっきにささぐ

作品データはこちら

江口週（1932～）は、ほぼ一貫して木を素材とした抽象表現を手がけてきた、戦後の日本を代表する木彫作家である。京都市の生まれで、東京芸術大学の彫刻科に学んだが、木彫を手がけるようになったのは同校を卒業したあとであった。1960年代に、「彫刻の新世代」展（1963、東京国立近代美術館）への出品や第１回現代日本美術展（1965）での大賞受賞などにより新進の木彫作家として頭角をあらわし、1970年代には平櫛田中賞（1974）、中原悌二郎賞優秀賞（1977）を受賞した。60～70年代の作品には、一木から彫り出したものと、大きなパーツを組み合わせたものが混在しているが、80年代に入ると、一本の長く大きな木材から彫り出した強い存在感のある作品の制作が中心となった。

この作品は、1989年に亡くなった旭川出身の木彫作家砂澤ビッキに捧げられたものであるが、決して情緒的内容を持つものではなく、作者本来の力強い量感のうかがえる作品となっており、上記の80年代以降の作者の特色をよく示している。江口は、柱上の鳥という形象をもつ作品を他にも制作しており、それはブランクーシの「空間の鳥」シリーズなどから啓発を受けたものと考えられる。ただ、そのノミあとを顕わにした造形には、木という素材が本来持つ原初的な性格が、作者の個性的表現と相まって、浮き彫りになっているといえよう。作者の言葉に、「木を彫る作業は、ノミを打つという繰り返しの作業である。その単調で、長い時間の中で得る木からの暗示は、僕の造形に深くかかわっている。木の持つ領域は、既に一つの世界をその生成の過程で象っている。その内側へ深くノミを入れていくことは、木独自の形体の中にかくされたもう一つの彫刻的形態を抽出することであり、彫る側の明確な意志がなければ成立しない。しかもなお、木の領域は厳然として残っている」（註）とある。作者の木という素材へのアプローチの姿勢がよくうかがえよう。

註・「木のかたちとエスプリ」展（1983 埼玉県立近代美術館）図録中の作者からの言葉を一部引用した

旭川美術館だより「氷華」No.31（1993.３発行）「収蔵作品から」より